

第10回 都市の個性：
椽内吉胤の都市美運動

都市計画史

2019 Planning History

2019年12月2日

中島 直人

地域性、固有性に対する価値観

日本都市風景

椽内吉胤
解説 芦原義信



筑摩叢書 312

椽内吉胤『日本都市風景』（筑摩叢書、
1987年） ※原本は1934年出版

「地方の町には、いわゆる「一丁倫敦」ではないが「一丁東京」や「一丁大阪」がザラに見受けられるわけで、もしも、一個気散じな旅人の心でもって漫然と歩いたならば、町の特徴も個性もあったもんじゃない。「この調子でゆくと、ついに、日本の町という所はみんな同じような町になり、郷土色は今後いくばくも経ずして亡びてしまうのじゃないか...」と心配して言う人も出て来るのも一応道理に聴えるが、しかし、結局、それはいささか認識不足というもので、なるほど町の古来の斉整性、純一性というものはだいぶ崩れだしてきてはおるものの、少しく注意してみると（中略）そんなものがどこに存在しているのかを訝るくらい特異な風景が現に在るんだからおもしろい」

「近代的営造物は、近代のいわゆるインターナショナル融通性でもってほとんど似たり寄ったりのものになっておるからで、かの近代都市からは地方色ともいうものが漸次亡失して、どこへ往ってみてもみな同じような風景の街になりつつあるといわれるのも一面道理なことだ。が、少しく注意して街の様子を観て歩いてみたまえ」

「地方の都市の人々はその都市がそれぞれもっている地方色というものを認め、ただいたずらに大都市の模倣なんかせずその独自の「持ち味」をなるべく醇化助長するようつとめて一層好ましい風景をもつ都市を造る方に今後方針を代えるべきだ」



椽内吉胤（とちない・よしたね 1888—1945）

1888年（0歳）	秋田県土木技師・栃内吉トの長男として誕生
1907年（19歳）	盛岡中学卒業
1914年（26歳）	早稲田大学英文科卒業 同年、佐渡毎日新聞入社
1916年（28歳）	東京朝日新聞入社
1918年（30歳）	東京朝日新聞退社
1922年（34歳）	『環境より見たる都市問題の研究』出版
1924年（36歳）	帝都植樹協会設立
1925年（37歳）	都市美研究会設立、幹事に就任
1926年（38歳）	都市美協会設立、常務理事に就任 『都市計画』出版
1934年（46歳）	『日本都市風景』出版 盛岡都市美協会設立に参加、顧問に就任
1935年（47歳）	都市美協会脱会、日本都市風景協会設立
1945年（57歳）	死去

橡內吉胤君

なら、いつでも通んで行き、その町の地良の端に一生を添ける」といつてゐるのだ。

如賀野には、自己設計の文化住宅がありそこにはお母サンやハサンがあるのである。東月になつたらまた右手の町を訪問行脚するといつてゐる。百鬼町事も岩手を所定して成美町迄だが、石が内君も岩手縣内に於ては、石黒君に劣るとも劣るものではなかつたといふ。

市計の発展を促せる事蹟ではあつたが、其門の人以外に、果して幾大の問題に対する積極的進取と用意をも持て居たものか。否だ疑しのである。彼氏の著書『市計畫』はかういふ點から眼が大きな福音でなければならなかつた。

それから御代二回づゝ、板野サンの札をのみに據つて果ては、市計上に立ち、市議會に出る、市中に對する調査を積極して得た結果をせんだ。又本社文化政策には名づけ現あり又市役所でもあつて、彼の熱心から感ずるであらうて、此點上、指導もし影響でもあつた。

氏は一度津行して、世帯を見て來て、太いに市計畫に建議しようと思つてゐたが例の世界的不景氣で、その目的は遂の知らなかつた。そこでいつその事、我が財源を濟り擴げてでも行かうと決意し市長を評した北田熾堂君を各小路に訪ねて援助を求めたのである。北田氏は機門君を諷刺して、更に相談をしとうといふ事になり二度會見を約して別れたが、その夜から、北田氏が病んで遂に、盛岡病院にあひつてたのであつた。若し北田氏存在せば、機門君も、いはば津行獨りで太いに實れ

盛岡中学（1907年卒業）

1902（明治35）年中退
石川啄木

1907（明治40年）卒業
椽内吉胤

1911（明治44年）卒業
石川栄耀

1914（大正3年）卒業
宮沢賢治



→「岩手の詩人計画者たち」



教室の窓より遁げて
ただ一人 かの城址に寝に行きしかな
啄木

早稲田大学（1914年卒業）



沢田 正二郎（1892-1929）
人気役者

「当時、文壇、劇壇の大勢力が早稲田学園を取り巻いていることを知っていた私は、まず手近な道として、早稲田大学の文科へ入ろうと考えた」



坪内逍遙、島村抱月・・・

橡内の年度別・媒体別著作発表数

[illegible]

【表－１】 椽内吉胤の略年譜と時期の区分

年	月	事項	網掛けは各時期の主要著作	
1888	3	秋田県土木技師・枅内吉トの長男として盛岡で誕生		
1907	3	盛岡中学卒業		
1914		早稲田大学英文科卒業 同年、佐渡毎日新聞入社		
1916		東京朝日新聞入社		
1918		東京朝日新聞退社		
1922	5	「環境より見たる都市問題の研究」5)出版		① 都市環境
1924	春	帝都植樹協会設立に参加		
1925		「椽内」という表記を使用し始める		
	10	都市美研究会設立に参加(主唱者)、幹事に就任		② 都市芸術
1926	10	都市美協会設立に参加、常務理事に就任		
	12	「都市計画」12)出版		
1927	12	新しい襖紙の会設立に参加(設立発起人)		
1928	1	盛岡都市生活研究会設立に参加(設立発起人)		③ 都市風景
1934	4	「日本都市風景」25)出版		
		盛岡都市美協会設立に参加、顧問に就任		
1935	11	日本都市風景協会設立に参加(設立発起人)、常務理事に就任、同時に都市美協会から脱会		
1945	11	盛岡にて死去。享年 57 歳		

「都市環境」の時期

佐渡毎日新聞記者（1914－1916年）



「都会と田舎との均衡がとれている間はいいが将来段々都市が勃大して村落が少なくなり群集の集住愈々度を加えて来ると益々空気の供給不十分となり、家屋がギッシリと密集して天与の光線をも遮られ人類の活力の上に危険なる兆しを現して来る時が来るに違いない」

『都会と田舎の児童研究』

（1915年11月～1916年1月、『佐賀毎日新聞』毎週月曜日）

『環境より見たる都市問題の研究』（1922年）出版

緒論

目次

第一章	都市の問題	一
第二章	環境に對する順應と改變	七
第三章	環境の人間に對する影響	二
第四章	人間の力と環境	二〇
第五章	環境と教育	二五
第六章	環境と遺傳	三
本論		
第一章	都市の環境と田舎の環境	四
第二章	都會と田舎の環境の身體に及ぼす影響	八
第三章	環境の精神に及ぼす影響	九

第四章	環境の感情に及ぼす影響	九
第五章	環境の知的方面に及ぼす影響	一七
第六章	人間と環境	二九
第七章	環境の改造（個人主義と集合主義、個人の事業と國家の事業）	一五
第八章	都市と田舎とに於ける兒童教育	一七
（イ）	斷片的知識の彙集と性的教育上の注意	一七
（ロ）	創造力の缺乏と趣味的偏倚	一八
（ハ）	彷徨癖と騷擾性	一八
（ニ）	都市兒童の衛生	一九
（ホ）	都市と田舎の小學校の學課	二〇
第九章	都會と田舎と宗教道徳	二四
第十章	都市計劃の問題、結論	三

※「環境」という用語

- ・ 1900年～ 社会的ダーヴィニズムの概念の広がり
- ・ 1917年 E. センプル（小田内通敏翻訳）『地的環境と人生』（原題はInfluence of geographic environment）、1918年「遺伝と環境」特集号『清郭』（女性解放運動）
- ・ 1920年代 地理、都市計画、芸術などの諸分野で定着

- 「諸君は都会に住まん事を欲するか、或は田舎に住まん事を欲するかと問われたならば、其の大多数は都会に住まんことを望むに違いない。併しその住まんことを望む訳は、広範なる人間の活動舞台に入って、出来得るだけの生活の享樂部分に徹しようとするからであって恐らく何人も雖も都会を住み心地のよい所とはなさぬであろう。
- 「将来の都会はどうしても、人工的要素と自然的要素とを、渾然調和せしめ理想の環境を現出せしめねばならない、その暁に於て、都会の環境は人間に幸福を齎らし、一層能力を発揮せしめ、人格を向上せしむる良き試練場となるに違いない」



「総ての科学を徹底的に応用して、従来機械的に出来上がった都会を有機体化し、しかも同時に自然化、公園化していく」都市計画が必要

「殊に都会は決して労働場であるということに限らるるものではなく住家である、吾々が健康で愉快地に住まうべき場所であるという重要な側面を忘れてはならない」

- 「少なくとも我々市民が近代都市生活に伴う種々の凶微を一層強く意識し、その救済をば単に市役所の仕事に委せるということではなしに、各自の現実・当面の問題として、将来都市の改造ということに協力して行きましたならば…」

枅内吉胤「乱脈な都会」『東京朝日新聞』、1923年4月2日)



関東大震災（1923年9月1日）

帝都植樹協会の設立（1923年）

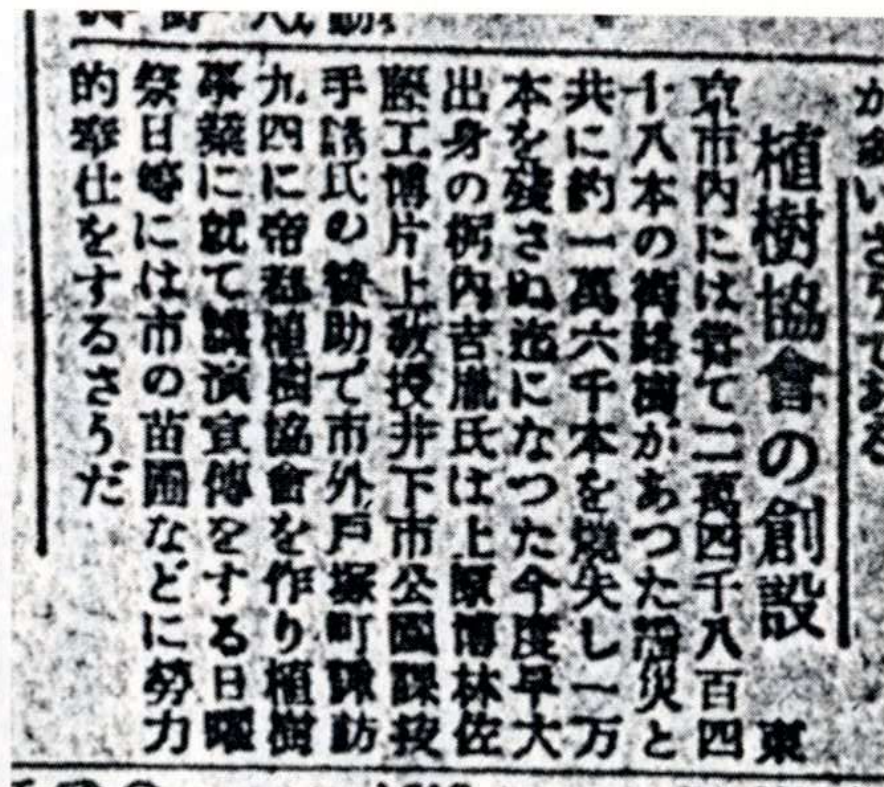


図7 帝都植樹協会の設立を伝える記事
（『読売新聞』、1923年10月27日）

「帝都の風致と衛生防火の上から東京市では毎年四月三日を『植樹デー』として小学生や青年団、在郷軍人団等に社寺の境内、公官署、学校の周囲に植樹を奨励して来たが震災のため樹木が焼損し枯死したものがおびただしいので一層の必要を認め府、農林省では帝都植樹協会と協力して来たる三日には大々的に『植樹デー』を行い当日は日清紡績その他から卅余名の男女工が参加し市内十ヶ所にわたって「木を植えませう」の宣伝ビラを五萬枚を配布すると」

『東京日日新聞』、1925年4月2日

都市美研究会の設立（1925年）

「今や帝都復興を控えて、都市の事業界彌々他事なる秋、タウン・プランナーやシビック・アーティストは勿論、建築家も美術家も、その他いやしくも都市改良家、都市研究家として都市問題に興味と熱意を有せらるる士は漫然書斎や画室に閉じこもっているべきではあるまい」

「都市美研究会の設立」『建築雑誌』、477号、1925年

變つた顔觸で
帝都美化の運動
やばな都を作るな
文學者や美術家も加つて

「野暮で不潔な都を作るな、貴族も文士も建築家も地味で美しい自分達の都を生み出せ」と叫んで二十三日、都市美研究会が誕生した。

會員には渡邊銀葉博士等の都市建設の専門家もあれば金子馬治博士や内田魯庵、近松秋江、野口米次郎氏等の顔も見へる、石井田孝氏や杉浦非水氏等の美術家。さては人間學者の島居龍藏博士や變つた統計家の油田文雄氏、それに市や大藏省等の技師を加へて實に多種多様の連中から組織されてゐる。

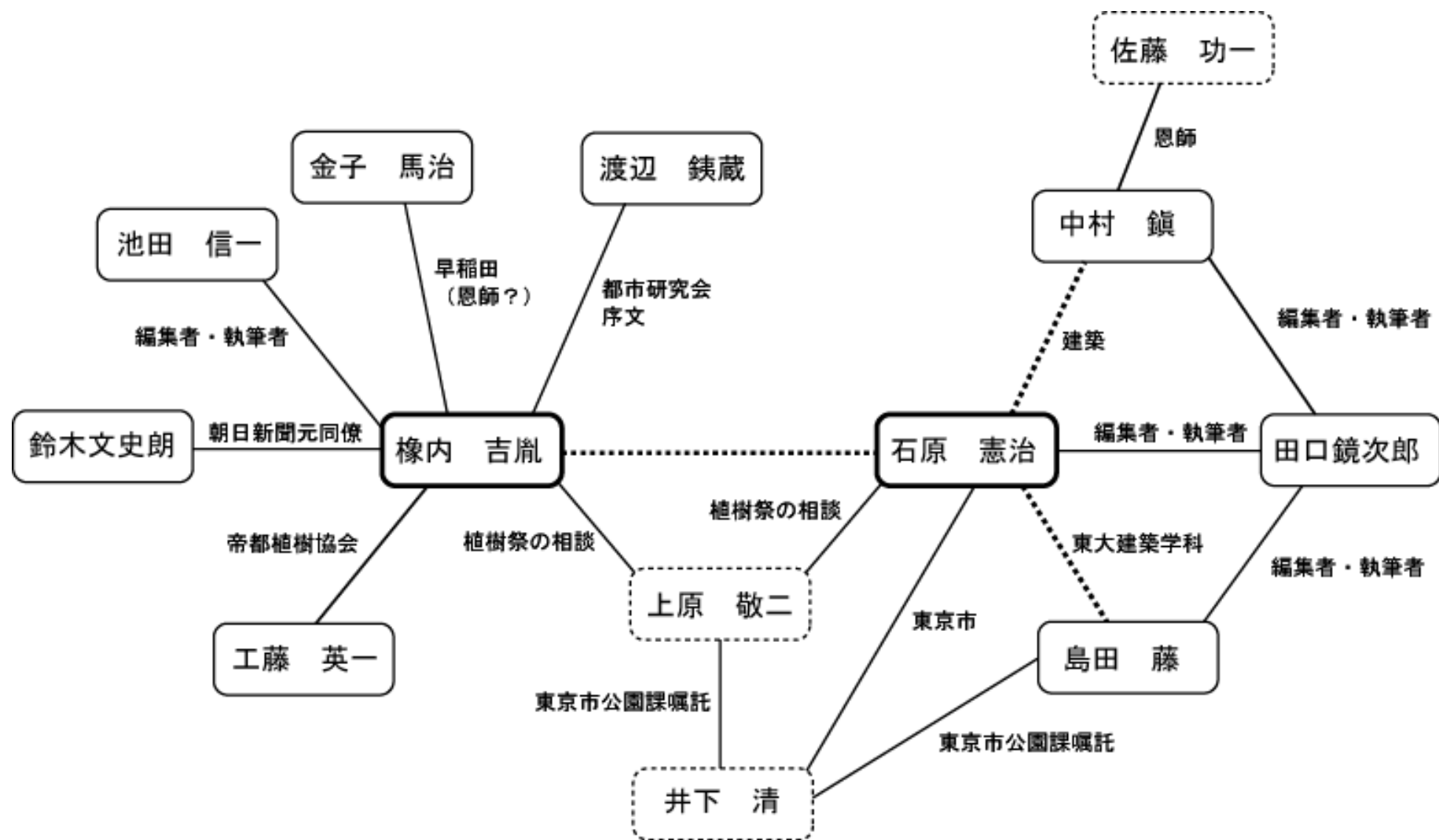
會は午後三時から、丸の内有樂町で開かれた鈴木氏が「役所等に招かれて意見を述べろ」とその場では面白過ぎる有様だと思はれるが、

散歩道 を作れ、品川の台場に火葬場を作るよりも芝居や藝者可にする方がよい」と注文の皮切りをする、建築家の島田藤氏。は「日比谷から丸の内間の電車を地下にして、日比谷公園と宮城前の廣場と聯絡した大公園を造りたい」と意見をのべるなどなかなか、はつて午後六時散會、今後は其儘家に入りて東京の美化運動を起すはず

會終るに同時に意見は忘れられて了ふ、いやれや餘興にやつてもらひたくない」と皮肉る、野大の國谷謙師は「丸ビルの様な大建築物は今後の東京から絶滅せしめよ、宮城のお茶に沿つて

都市美研究会設立発起人

氏名	職業	当事の状況
渡辺 鋈蔵	経済学者 (東京大学経済学部教授)	1885年生れ、1910年東大政治学科を主席で卒業し、そのまま渡欧し、1916年には法学部から独立したばかりの経済学部教授に就任。都市計画調査会委員。1923年には『都市計画及住宅政策』を刊行。帝都復興院評議会評議員や特別都市計画委員会委員、そして都市研究会理事を努めるなど、当時の都市計画の専門家之一人。
金子 馬治	哲学者 (早稲田大学文学部教授)	1870年生れ、1884年東京専門学校を卒業し、その後ドイツ留学を経て、1907年から早稲田大学文学部教授であった、哲学者で、金子筑水の号を持っていた。1925年には『芸術の本質』を刊行する、芸術に関して非常に造詣の深い人物であった。
田口 鏡次郎	編集者・評論家 (美術雑誌『中央美術』主宰)	1875年生れ、日本画家平福百穂と同郷(秋田県角館)で、その影響を受け、上京し、雑誌編集者、流行小説作家等を経て、1915年には美術雑誌『中央美術』を創刊し、以降美術雑誌主宰兼美術評論家として活躍していた。
鈴木 文史朗	ジャーナリスト (東京朝日新聞社会部部長)	1890年生れ、1913年東京外語学校英語科を卒業し、三菱合資会社地所部を経て、1917年に東京朝日新聞の記者となった。外務部に配属され、得意の英語力を生かし、特派員としてパリ講和会議やロンドン軍縮会議等を取材し、1925年には社会部部長に就任していた。
中村 鎮	建築家 (中村鎮建築研究所主宰)	1890年生れ、1914年早稲田大学建築科を卒業した。在学中の1913年から『建築ト裝飾』の編集主任を努めるなど、早くから建築評論家としても活躍していた。1920年には中村建築研究所を設立し、中村式ブロックという特許を生かし、活躍していた。
島田 藤	建設業・建築家 (株式会社島藤)	1895年生れ、1918年東大建築学科卒、建築家であった。三井合名を経て、1921年には父親島田藤吉が社長を務める島藤に入社し、1922年には欧米の主要都市を視察した。『中央美術』や『中央公論』に都市美や帝都復興に関する論説を発表していた。
石原 憲治	市役所職員・建築家 (東京市技師)	1895年生れ、1920年東大建築学科卒、東京市復興総務部で都市計画に従事する技師であった。1924年8月には『現代都市之計画』、11月には『全体の回復 文明に贈る』を刊行するなど、新進気鋭の建築家であった。
椽内 吉胤	都市研究家・ジャーナリスト (工人新聞社社長)	1888年生れ、1914年早稲田大英文科卒、新聞記者を経て、都市環境問題及び都市計画を専門とする研究を行っており、1922年5月には『環境より見たる都市問題の研究』を刊行し、その後、新聞等に都市の美化運動に関する論説を寄稿していた。1924年からは帝都植樹協会で緑化運動を始めていた。
池田 信一	蒐集家 (森永製菓社員)	1901年生れ。明治薬学校卒業。1918年から1923年まで海軍省、造兵廠で科学部門の仕事を担当。その後、森永製菓に入社。当時から既に蒐集家・池田文痴庵として知られ、絵葉書、ポスターから恋文まであらゆるものを蒐集していた。関東大震災当日も、瓦や電線の蒐集を実行し、「震災地図」を作成していた。
工藤 英一	市役所職員 (東京市社会局)	1899年生れ。専修大学大学部経済科卒業。1924年3月末日より東京市社会局公営課に勤務していた。



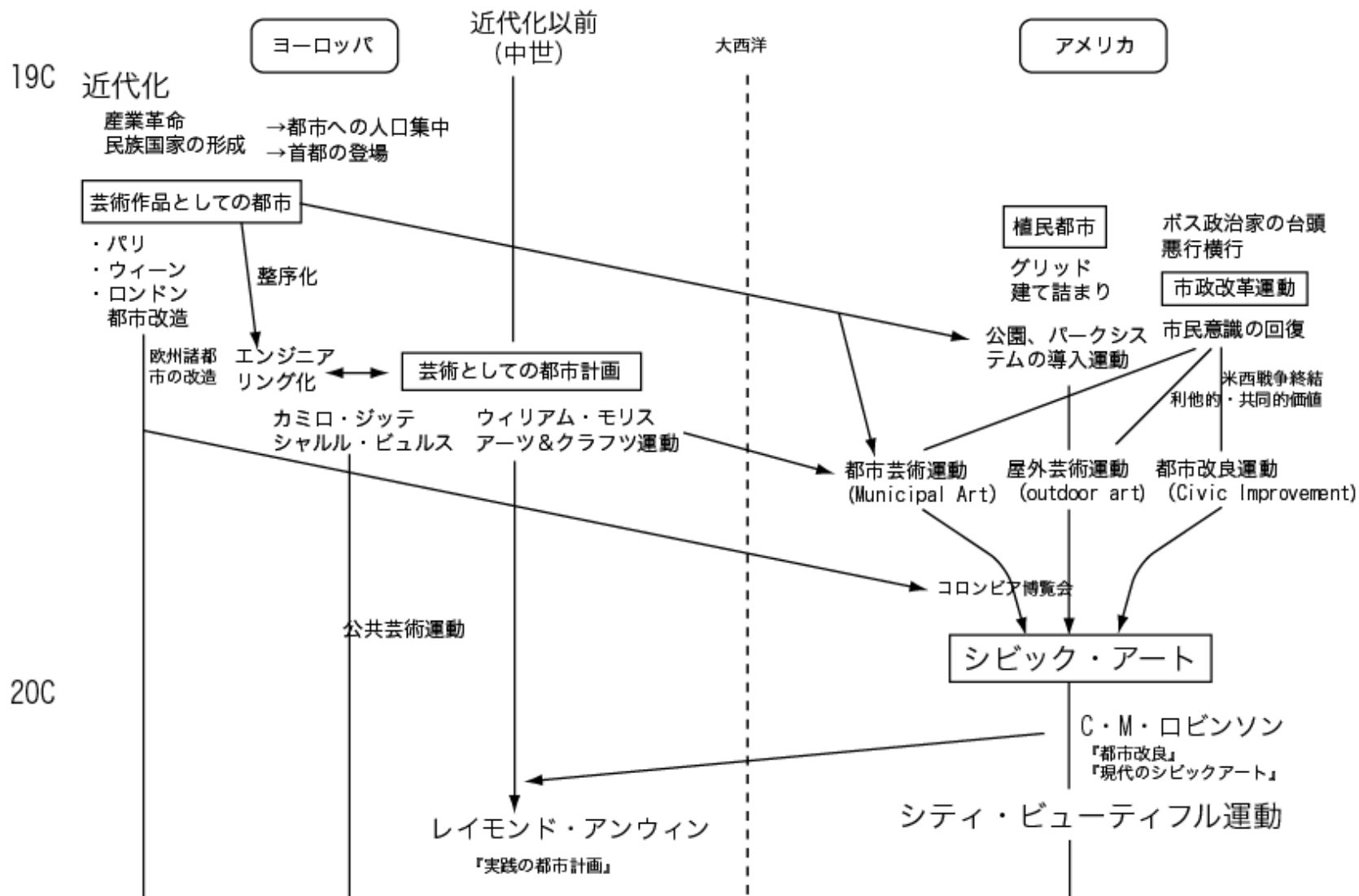
「都市芸術」の時期

「都市芸術」の導入

「都市美」 = 「Civic Art」 = 「都市芸術」

- 「内部から発する、社会生活のいみがたき表現」
- 「装飾ということに止まるのではなくて、市民の生活に必要であるところの、あらゆる施設、行政、経済、交通、保安、衛生、教育等一切の都市の施設を含んでいる」
- 「あくまでも公共乃至民衆をその目標としてをると同時に、「実用」ということに立脚している」

椽内吉胤「都市美化運動と都市芸術（二）」『都市公論』、9巻5号、1926年

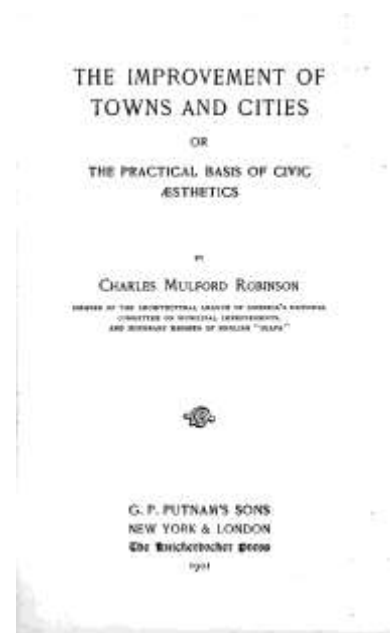


19世紀末から20世紀初頭にかけての「シビックアート」生成の構図
(中島直人『都市美運動』、2009年)



チャールズ・マルフォード・ロビンソン (1869-1917)

ジャーナリスト、著述家。アメリカ都市計画最初期の重要な著作の著者。のちにイリノイ大学シビックデザイン学部教授。都市計画コンサルタント。



『都市の改良、または都市美の実践的基盤』 (1901年)

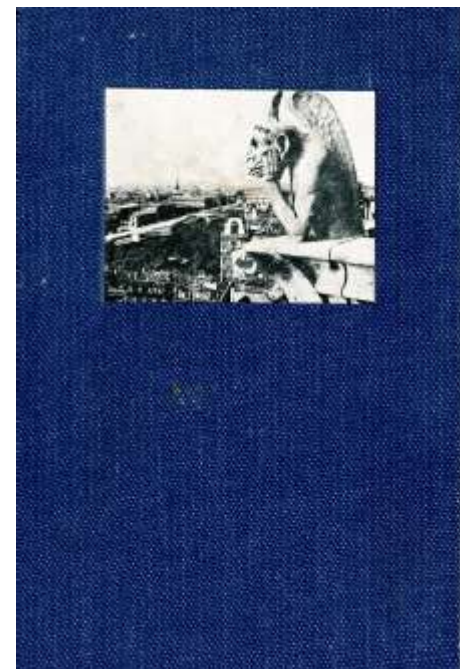
- A 都市美の基本
- 1章 都市のサイト
- 2章 街路計画
- 3章 基本的な建設
- B 街路の美
- 4章 我慢と抑制
- 5章 広告問題
- 6章 機能を美しくする
- 7章 樹木の重要性
- 8章 ガーデニングの可能性
- C 社会的・慈善的努力の美的側面
- 9章 公園と道路
- 10章 広場と遊び場
- 11章 建築の発達
- 12章 建築の義務
- D 教育的努力の美的側面
- 13章 彫刻の機能と配置
- 14章 芸術に関する一般教育
- E 都市の美を守る手段
- 15章 個人、ソサイエティの仕事
- 16章 行政の仕事



『現代のシビックアート、または美しい都市』 (1903年)

- 1章 都市の新しい時代
- 2章 シビックアートであるもの
- 都市の着目点
- 3章 水のアプローチ
- 4章 土地のアプローチ
- 5章 行政の中心
- 業務地区
- 6章 業務地区での街路計画
- 7章 業務地区での建築
- 8章 街路のファニッシング
- 9章 噴水と彫刻の賛美
- 住宅地区
- 10章 家の間の通りの構想
- 11章 大きな通り
- 12章 小さな住居用通路
- 13章 共同住宅の間
- 大都市
- 14章 総合計画
- 15章 オープンスペース
- 16章 パークウェイ
- 17章 公園の分配と配置
- 18章 公園の発展
- 19章 一時的な装飾

『都市計画』（1926年）の出版



- 一 緒言
- 二 『都市』に関する図書目録的考察
- 三 我都市研究不振の原因
- 四 都市の発生
- 五 都会の魅力
- 六 都市計画の定義
- 七 都市計画の歴史
- 八 最近の都市計画の傾向
- 九 地域
- 一〇 センター
- 一一 サイトとサイトプランニング
- 一二 街路
- 一三 都市美と広告看板

- 一四 高層建築
- 一五 街路樹木
- 一六 公園
- 一七 散歩道
- 一八 橋
- 一九 都会と水
- 二〇 都市の発生と『銀座』
- 二一 朽廃に瀕せるセントポール
- 二二 十字街に立ちて
- 二三 都市美化運動とシヴィックアート
- 二四 都会を取扱った文学
- 二五 アカシヤの都
- 二六 都会の幻想

終章 都会の幻想

「これまで自分の家さえよければ他はどうでもいいと思っていた市民は、漸次共同の住家としての都市のいうものを考えるようになり、都市が段々整頓し、活動に便利であるということと同時に、愉快的な所ということになれば、自づからシビックプライドを感ずるようになり、始めて愛市心の芽が萌出し、自治の精神にめざめるようになるでしょう。斯した経路をとって、我国の都市は、当然模倣の域を去り、更に独創の時期に進んでゆくではないでしょうか...その時期になっては、都市改造の動力は、役所ではなくて、市民の共同に移り、随分思い切った改造計画が企図されるようになるでしょう」

都市美協会への改組（1926年）

「研究機関たる都市美研究会が此の使命の強化を図り実践機関たるべき工作としての改組」

上床三次郎「都市美協会の組織並活動状況」（都市美協会編『第四回全国都市問題会議総会提出研究報告』1934年

「都市美運動の真の使命は、単に都市の細部の美醜如何を云為するに止まらず実にその都市の進路を効率的な活動場となすと同時に美しく愉快的健康地となすように仕向けてゆくところにある。斯る都市に於てこそ始めてその市民はシヴィックスピリットを持ちうるようになりパトリオチズムが助長される。近代の都市美運動は実にかのタウンプランニングと相俟って市民に対しその揺籃地を約束する切実重要なシヴィックアートでなければならぬ。」

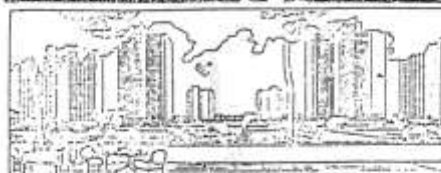
阪谷芳郎「都市美創刊に際して」『都市美』、1号、1931年



阪谷芳郎（1863- 1941年）
大蔵官僚、後に政治家に転身。大蔵大臣、東京市長、貴族院議員を務める。都市美協会会長。史蹟名勝天然紀念物保存協会副会長。

No. 1
1931. 4. 1

美市都



風 吉 內 機 人 柳 年 星 科 國 候 行 日	
國 公 谷 比 日 市 京 則	所 行 日
合 區 方 市 都 內 會 經 國 政 市 京 則	
地 香 瓦 日 丁 三 時 錦 區 神 市 京 則	所 行 日
所 網 華 出 太	
品 販 賣 ・ 行 發 日 以 利 亞 日 特	

都市美

創刊に際して

男爵版

近時我都市にも漸く都市英の弊が盛まり、都市の複雑なる機構を打つて一先とした一大調和團たらしめんとする要求が起りつゝあるのは、我都市の將來に對して憂はしいことである。

然れども未だ國渡期の域を脱せざる我郡市にあつては、一方に傳統的哲物が依然として存息するかと思へばその一方には突發に萌し

いものが吾人の視野に現はれつゝあるといふやが如き時期である。理窟、建築を始め凡ゆる都市の施設に於て、そこに新舊商店の不調和と同化状態と半開状態との粗細とを見分ける。斯る推移の劇しい今日の都市に對してはよほど強大な先制的規制力を働かすにあらざれば到底我都市を今日の無秩序と混沌と不調和から救ひ出すことが所望であらう。

都市交通の紅の使命は、常に
都市の細部の美醜如何を云々する
に止まらず實にその都市の歩調を

上野への御道筋に
見苦しい悪看板

都市美協會でしらべあげて

何とかせよと建議

御大典を發會に蒙り、總務安部では實卜各表を通じて帝座の美觀を損ふが如き有狀、幕府の取締を行つたが、その結果は大して効能なく帝座の町々には

依然
として位置不變な

會場が充ちてゐる有様なので郡用
業協會では場内理事に頼み特に十
一月十三日上野の市立會堂式場へ
テニ場員が下りて來たはに下野

一、廣内區の一時的とはいへ歩道上に出づ違つてゐる事

堅實な店は

落ついて

右に、松内氏は語る一文即ち
市川氏は今少し教養のある審

愛顧を以てて市街を美しく整頓せしめねばなりません、江戸時代の商人は却つて一種の地獄を守り、突飛な賣状を繰ひ均都のある落ついたものを擲んだやうです、商人はよろしく製板屋の宣傳に賣けず見識のある看板を苦心したらどうでせう、私の開けたところ一體に堅實な店は矢張り看板も落つたいいのをだして閉る様です」

都市美聲刊に際して

合 興 隆

目次

次
都市の発展と経済

今日の東京に對し

一、最も風致を害してゐる事

II、最も品値なげがしてある事

口 女よとて言ひまじき事なり

エーランド・エーランド・エーランド

エドワード・グレンの証言によ

四、沙市市の衆議院選区……

2000

ンダランド銀行の女僚

コールビュジネスの都市計画

(III - E - 60)

ブロムナード

(內外科圖書集成)

交通事故—都市の色彩—街路樹

第二、三、四の三つの問題について、

「おとこ」

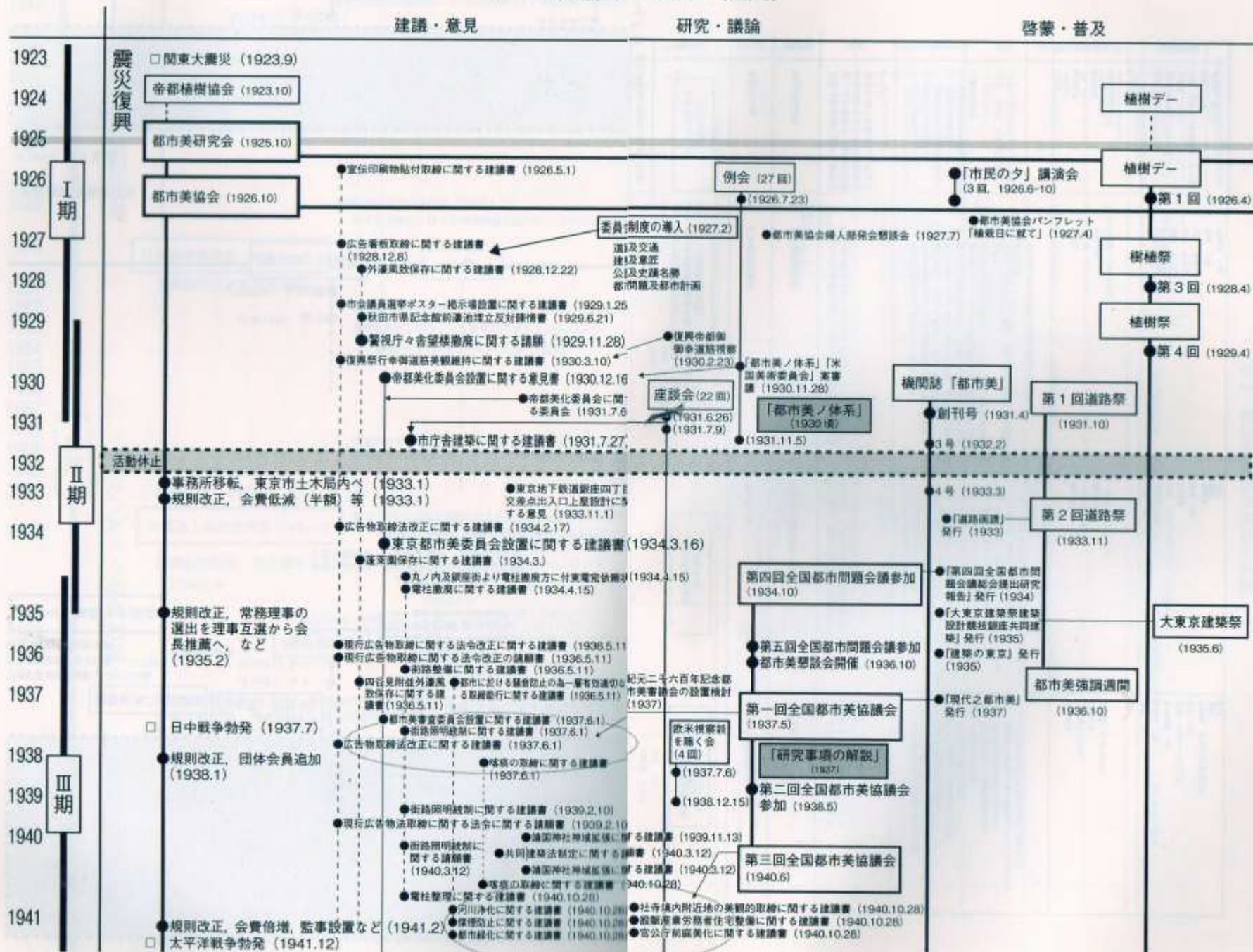
韓世 (國令の斗雲四用)

陸田森林公園 (公園)

編輯しめくくり

Figure 2. The effect of the number of iterations on the accuracy of the proposed algorithm.

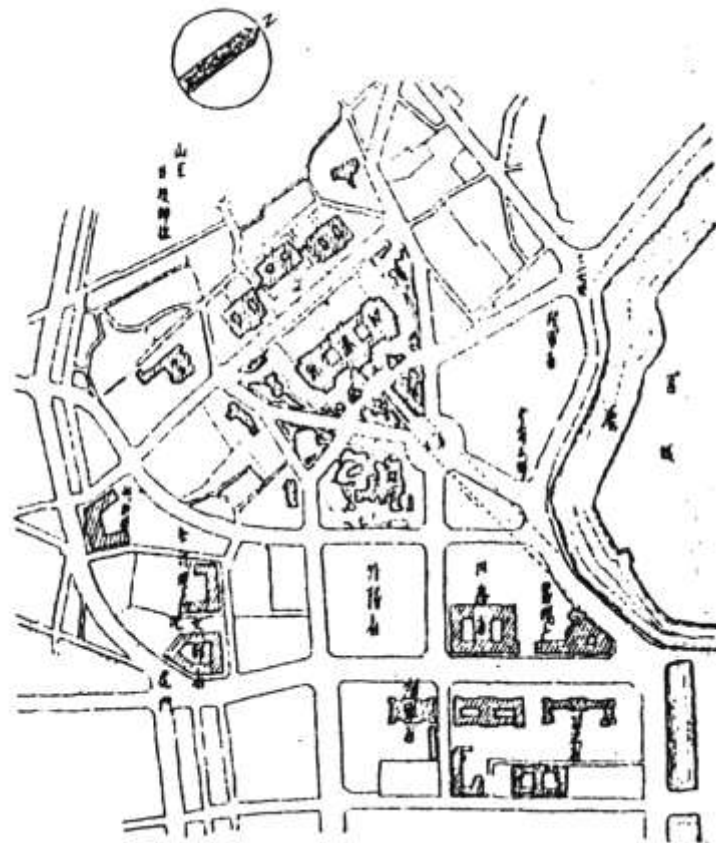
表3 都市美協会の活動変遷と時期区分



警視庁望楼問題 (1929年－1930年)

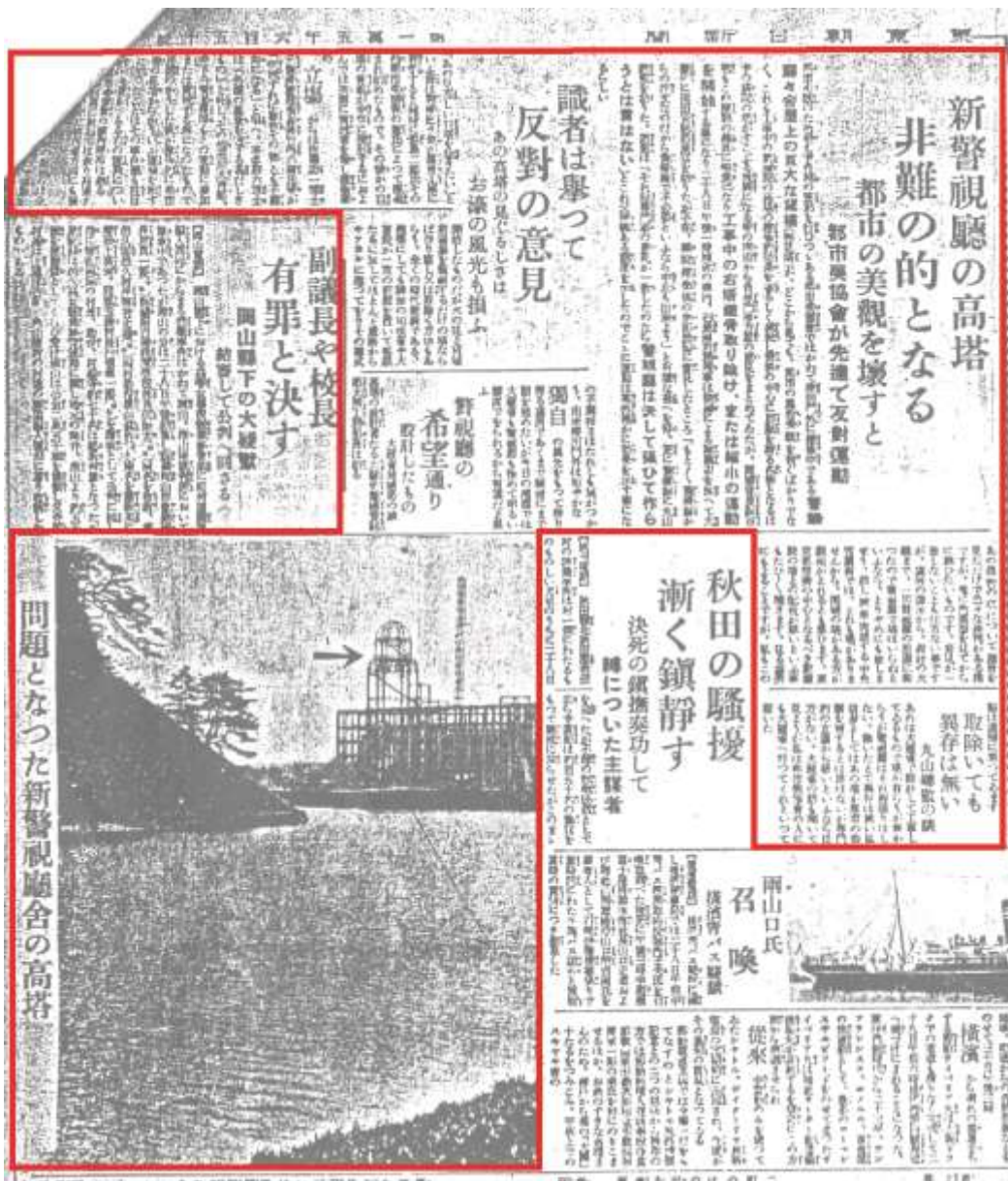
中央官衙計画 (1926年)

(新名種夫「都心地の計画と東京市庁舎」(都市美協会編『現代之都市美』、133－152頁、1937年)の145頁)



桜田門から警視庁、国会議事堂への眺め
(建設大臣官房官庁営繕部『霞ヶ関100年－中央官衙の形成－』
(社団法人公共建築協会、1995年)の76頁)





椽内「建築にしても隣接
 の司法庁や大審院が一定
 の前庭を置いて整然たる
 に反してほとんど道路から
 キッカケに建っており
 その様式の不調和さは誰
 しも気がつく、由来桜
 田門外は和やかな、独自の
 風光をもって誇り得る
 場所であくまで解体にま
 で話を進めたい」

(『東京朝日新聞』、1929年11月29日)

日土協會の
御成婚奉祝

高松宮兩殿下
の台臨を仰ぎ

[illegible]

遂に取除けられる
新警視廳の高塔

各方面の要望を素直に容れて

三十五尺を切取る

國の重要中の要所、局の塔は煙臺目
標を付けたところ、塔の上から
大きく過ぎて形も異なるといふ
ので、間隙になり、地形が先にな
つて取り除ける。

[illegible]

オラシタツな盛朝と強めて不調和であり、更に可成外縁一帯の松など水配した柔らかな風景を打撃するものであるといふ点地から盛朝に反対して來たのです。丸山盛朝がかうした民間の悪意

運動を 開始し、丸山

官内省、方官の閣も
難し、新制と新制の關係、新制と新制を
をいふことに附けたのである
る京師に於ける新制の東洋に
似し、新制の東洋に似し、新制の東洋に
その高きに於ける新制の東洋に
はすであつた、新制の東洋に

警察を
若い女の
民衆との接

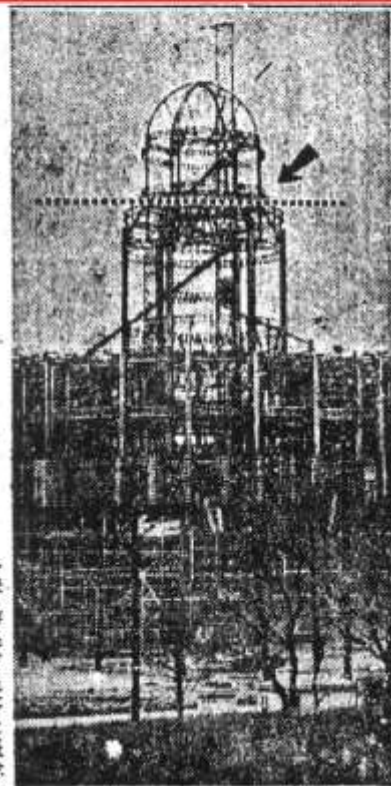
の大疑獄

結審す

二年に渡る審理
五十余冊二萬枚の調

[illegible]

切取られる警視廳の高塔



【資料提供】

を快く容れてくれたことは余
未曾有の英断で、都市奉還勅の
案に明るい光を投げ與へるもの
と思ひます」

暑熱

天然痘發生

本島人二名、二十七月には、
大谷と三谷の屋敷を焼くなどして

警察を柔く
若い女の事務員

民衆との接觸にも好都合と

中野署長の妙案

いかめしい、口々に五虎を
女軍勢が現れた。これは各地の
豪傑、いすろく全國の豪傑を
集めた。口々に五虎を

選ばれ

英斷

樹內都市美
協會理事談

「私共の見解ではあの塔は今や出来ぬ新鋼筋建築の効果を減損すると共に周囲に汚染してゐる同様な塔東塔などの問題を持つ會の構内理事は然る

を著したといはれた中野實は、
「國々々と大騒ぎの興までできりつた
ればならぬ。」「財政難の折衝
を先くで民衆との関係も、
「國々々と大騒ぎの興までできりつた
ればならぬ。」「財政難の折衝
を先くで民衆との関係も、

から多量に吐き出した人間でな
てはならないと、胸べにかけて
お手の物の贈ること、十分に開
の下で選びだされた女性にけに
わ子さんは新妻とは思ふ(ゆが)
と熱く窓口に涙を流し、胸べを
客の田舎を眺めたり書物を見てき
き、理して大いに

秋田市濠池埋立問題 (1929年－1930年)



保存された秋田城濠池（1960年代）

（越前谷国治『40年前の秋田市』（無明舎出版、2003年）の18頁）

	椽内の論考	都市美協会の動き	秋田魁新報	県の動き
1929	※4月 佐竹家、秋田広小路に面する濠の埋立計画を発表			
	●5月14日 「秋田市民に訴ふ」 ●5月26日 「広小路お濠の命乞のために（再論）（一）」 ●5月27日 「広小路お濠の命乞のために（再論）（二）」 ●6月16日 都市美協会のお濠埋立反対に関する記事に談話 ●6月22日 「鯉沼知事に一言 濠端埋立問題について」	■6月14日 都市美協会理事会 ■6月中 秋田市県記念館前 濠池埋立反対陳情書 ↓ ■7月 文部省から秋田県・市に照会	●5月20日 鼎洲「都市美と市民生活」で椽内に賛意を表明 ●5月30日 社説「県市当局者に望む 外濠埋立問題」 ●6月14日 連載「一町一景」で外濠が取り上げられた	●6月16日 鯉沼知事・埋立妥当を主張 ■7月 秋田県知事に菊池慎三（都市美協会理事）が就任→埋立中止
1930				■6月 菊池、知事辞任
1931	※3月 佐竹家、再び秋田城周囲の濠の埋立計画を発表			
	●4月7日 濠埋立反対に関する都市美協会の記事に談話 ●4月23日 「濠埋立反対 その理由を明確にする」	●3月14日前知事・菊池慎三の意見書を送付	●3月25日 社説「都市美の破壊を防遏せよ」	

「その後或はこの埋立に反対する市民諸君の輿論が起こっているかも知らんが、そうした輿論の起るのは当然過ぎる程当然なことで若そうした輿論が起らぬとすれば、悲しいかな秋田市民はシヴィックスピリットを持たぬことを語るものであり、全くどうかしているものだと思う（中略）如何にしても黙しがたいものがあるので、ただ纏まりもなく素直に自分の考えを吐露して大方市民諸氏の清鑑を乞う次第であります」

椽内吉胤「秋田市民に訴ふ 濠端の埋立と醜悪なる看板」『秋田魁新報』（1929年5月14日）

→なぜ保存すべきなのか

①都市個性上の重要性、②風致保健防火上の利用価値、③名蹟保愛

「都市美とうものは要するに都市精神の欠如せる所には発露するものではなく、また都市美というものは単に個々の事物の美醜に目安を置くものではなくて全体としての構成美...総合美を指すものなのである。由来この都市美なる言葉は往々曲解され易いのであるが、それは決して余贅的な美醜の問題や添加的装飾をのみ意味するものではなく、それは飽くまでも都市の実利実用に根ざしておるでなければ真の都市美があり得ないのである」

椽内吉胤「鯉沼知事に一言 濠端埋立問題について」『秋田魁新報』（1929年6月22日）

盛岡での都市計画実践運動

- 「今年の夏、久方ぶりに盛岡に帰り、なつかしい山河に接することが出来ました。東京のゴミゴミしたさうざうしい街から見ると、盛岡の街は、空気の清澄そのものがもう私の心もちをさはやかにしてくれました。」

(栃内吉胤「盛岡の聖化 都市造営の上から観て」(『岩手日報』、夕刊、岩手日報社、1926年3月14日)

都市計畫は必然的なるもの

昨夜商陳樓上に於ける
柄内吉胤氏の講演

都市計畫に關する講演會は十三日午後七時から國會議事堂附屬禮堂で當地出身所屬の議員、議員、市議員によつて行はれた。國會議事堂附屬禮堂等三十餘名、同十時散會したが講演要旨を左の如し

都市計畫といへばく大の經費を要するもの、斯く考へてゐるがまづ

市民は 國會議事堂といつたあらゆる方面から集連して都市計畫は必然的なるものである。たとへば鐵道局ができないといつて國會議事堂が必要ないといふことは矛盾してゐる筈、おおよそ文化的生活をいとなんとするものはまづ都市計畫の必要をさためこれを理想的に實現することに努力せねばならぬ。故にもし

盛岡市 が、地方電、國會議事堂と隣接する場所あるならばその都市の局々々々的でも都市計畫にちかひ、國策のもとに市街地を構成せねばならぬ。かのニムウヨウは最初、盛岡の都市計畫とたてゝ見たもの、その結果一朝大震災大地へんに押退するや非常口に不便を感じ多量の犠牲者を出したのにかんがみ更に國會議事堂に隣する一校、國會議事堂を隣接したがその費用、國會議事堂といふ多額の巨額の費用もある。更に都市計畫に關し世にさうくにして都市計畫といへばその都市における實際なる市街、國策といつた一面的の點を過ぎが斯く誤解してゐる。我れ等が作る都市をばまづ市民の一個の家庭として、市民の利益を第一として神化されたる費用が過ぎたに際して都市中心の良心から出發して停かなければならぬ。斯く都市を建設するにあつて市民は自らの利益を自國に關聯し市の繁榮、發達といつたことに無關心であつてはならぬ

そゝに 都市計畫の費用を見出すものである。國策市計畫に關する講演會數十席を兩限はに關聯して一觀に觀望させた

(『岩手日報』、1925年8月15日)

實地に就いて懇切を極めた

椽内氏の都市計畫講演

昨日本社前より肴町までに於いて

雨を突いて熱心な聴講者

都市計畫

の概要を概

椽内氏の都市計畫講演は一日午後一時半より本社主催のもとに催された。聴講者は縣島市警署長、市役所より田口土木係、山下、堀村、安藤、谷の諸氏、小山、中野、新井、柳屋の等の諸氏等十數氏が参加した。まづ

本社前

で、都市計畫に

關する一連の講義があり、夫より雨を突いて徒歩で内丸通りを南進し、櫻山神社前に足を止め矢張り此地は社を中心として生れる、此處が盛岡の中心だ。然し東岡の代表的道路たる内丸通りは砂利を永久に食ひ毎年豫算が増加するばかりだから思ひ切つてペトブメントにする事だ。市は六間あるが出来るなら十二間位にして歩車道の區別と街燈が欲しい。

等種

の、説明し、夫

より市役所前にてカーブがあまりにも急で、交通調査が必要な事から、觀望の警察に移り、それから中の區に至り漸に歸する一連の計畫を述べ、櫻山神社は散歩道として永久に保存したいものだ。と語終した。そこから椽木町と共に盛岡縣界の中心だ。

盛銀前の

十字路で、

盛岡市の都市計畫の概要があつたが、その頃から聴衆が益々多くなり、人の多き賑やかな賑を指示員後に三階、銀行前で存心の鈴蘭燈を批評し、あ

△櫻山神社前に於ける臨地講演

(盛岡市警察を手にせるが椽内氏)



二、大通の記念塔について

東京 栃内吉胤

[illegible]

化驗院に送られるといつたバツ
リツクな事でもつたものの、金満
ならいざしらず土地で儲けやうと
する一帯の豪族の私的記帳を天
下の公認の官出づて建て
たからつて、それは都市美をきづ
つけ、エナリ雑誌に露顔の都市美
に登場する所にならん

聽てるとしたらどうか……そんな
野郎な会をするものも、やあ、や
あ、と思ふよ、安部先生も、櫻井
市美の上からも、顔と涙水のやう
な非難に逢ふべきだ。

通うりてそんな犯罪を遂げる位
な、輕い小説家にも附合せしめ
たら、輕い小説家にも附合せしめ

一休、勝市美といふものは何時も
いさすつぱり、説きまはつて歩くこ
となんだが、疑なな「愛知縣」を言
味さない（「胃腸」勝市美といふ音書
が読解されやすい）そんな私的な
な話、お話を述べてることが、勝市美だ
なんて嘲へることはそもく「大衆
語り」、むしろ、さうしたものをや
むらに描いてさせたいとすること……
ひやみと影の暗いなことをするこ
とによつて、驚々々然たるべき都
市の醜態をとつて明されることを厭
對せん」とするところに、勝市美の眞
實があるのだ。或、對等の醜態の
あるものに、この種の「醜態」なんか

小松節子道つた女だ、地位が
きていて市民にも慕はれることであ
らう……でなければ、酒席の端の
ある僅かなりの距離を越えるなり
一つ、腹いせで「醜態」なんなり、
指図さんなりを差した男が、どど
れたけいよかわらん」（『愛知縣』
醜態）なんか趣意のことともよい）醜
の世時に「記念館」なんかは、よく
く「醜態」の女人の顔から出たら
いかん件々の記念館だと思ふ、とに
かくだいの記念館にまさか三冊さ
の類案のあるまいと思ふのだが、
「記念館」の場面に於ては私は、さ
うまで言ふべくともよそうにお

もはれる、角だつた言葉で終に成

註の意を曉得せざるをえんのである。誠哉、經解の計司がある應に。私などの厚顔なんぞにかまはず、一行に移されたであらうが、建つたとしても、遠慮から、それは經解の辭意に附いて行註を印するものとして後世に殘るに値ひない。私はなんにでもよくケチをつけるやう

に要取られるかも知らんが、これ
まであくまでも是非を争ひ込んで
きたことは、戦ひに大英の諸士のため
に要する所と思ひます、そして
吾等の盛衰はたゞで結構でない
美しい町といたして、そして多分
じてゐる矢先、それを打つてはす
やうなことが起つてゐるのは堪
くも遺憾である。この點に、
なるべく餘計なことを取つたりな
るべきと思つてゐるのだが、黙して
置くに及びない、形があるで候
程を以て、**「東京新聞」の行**
をまつ所だ（矢野文庫）

（昭和八年八月七日）



「寫眞を見て

盛岡の都市美に寄與する長橋の出現を慶ぶ

橡內吉胤

我したのは鹿が昭和二年の秋獲だつたと思ふ。その當時、市の口口に木更張は、世から鹿師八景の一に数へられ鹿師の鹿師にあらる鹿師をば、何とか名指し能く衆人に知れたいものだと、いたく心を配られて、不肖等とともに、當時の市價最上、祝賀治郎の鹿師に頼する二三の輩を常師に提置したことは未だ鹿師に存しておられる方もあらうと思ふが、この被衣式を擧げた祝賀治郎を本振上の事

鹿師が祝賀治郎なり（その當時祝賀治郎の鹿師には、鞍馬村長森田君が當つておられた）。鹿師に就かるまでも引續きその儀に盡つて居たものと、感ふが丁度鹿師四野村の號手日順の文化振興會のため願ひした所に、藏人木更張を訪れて、木更張師不在新になつた明治鹿師の鹿師を見せてもらつたが、それは、だいたい無職なもので、私どもの鹿師の鹿師は牧場であつたことを重なるものであつた。

さて、いよいよ去る二日に竣工式を擧げた祝賀治郎を本振上の事

御殿が祝賀治郎なり（その當時祝賀治郎の鹿師には、鞍馬村長森田君が當つておられた）。鹿師に就かるまでも引續きその儀に盡つて居たものと、感ふが丁度鹿師四野村の號手日順の文化振興會のため願ひした所に、藏人木更張を訪れて、木更張師不在新になつた明治鹿師の鹿師を見せてもらつたが、それは、だいたい無職なもので、私どもの鹿師の鹿師は牧場であつたことを重なるものであつた。

さて、いよいよ去る二日に竣工式を擧げた祝賀治郎を本振上の事

[illegible]

市、町、村の合併の計画において、その全般的な都市発展の向上に依つて、その人々の生活の標準が漸次高まられるやうにするのが市とて、必要なる當然の責務だと我々、市民側からしても、とにかく大膽な決断だけでも、それに付くべきものがある。それならば、市、町、村の合併の計画は、それな

を奪立せしめる劃を設つて、マツシグダなる半島の珍石を掘れたのは又つて妙案附だ。その高麗、對馬兩つながら十分モン味もあり且南洋の美味でもある。横上ヨシシブボストの位置も、よく高麗に取替つたりするが、サイドウオークに備へたのはいい。ただ、廊下入口に懸る三基が筆道にはないで、あるのは愛蘭の織物となるのが露骨が出来ない。

此は、露腹をつての箱だから世界の賑わいかいれ拜らんし、樹皮に通ずる道路の傾斜の緩度も

家と多くの工人の努力と都市建設の基礎固めによるものとして、その努力、この壁面に輝く善人は皆に鑑養な心持ちで鑑賞すべきものだ。しかし、その感嘆が善むるもの即ちを棄断らずに愛蘭の都市風情に一途の判教を加へたことを衷心から厭惡する。

次に、この壁、吾々は既述出所の際びの4層目に、その奥庭位置の更にためといかに臨海市会館の利便のためとはいかに、その生活線である商業の繁栄を暗示するものが巴々にならうとした人々の雄姿が、壁を十分に表現すべきだと考へる。

だ。かく、
市部の間での
賠償といつてよい
賠償する案だ。

	盛岡の都市づくりに関する椽内の論議	盛岡の都市づくりの動向
1925	「都市計画は必然的なもの」(8.15)	●椽内、都市計画に関する講演会。 都市計画参考品も陳列(8.13/19)
1926	「盛岡の聖化」(3.14～:2)	●岩手日報社説「都市計画調査会に就て」(1.12)
	「都市計画は早きを尚ぶ」(6.10)	●盛岡市議会が都市計画導入を可決(6.22)
	「盛岡都市計画と農校田圃埋立」(8.25)	●椽内、都市計画臨時講演会(11.1)
	「盛岡市と都市計画」(11.3～:4)	●岩手日報社説「都市計画の準備」(11.7)
		●椽内「都市計画」に対する岩手日報書評(12.22)
1927	「民衆都市時代」(1.20～:2)	●盛岡市、都市計画の基本調査開始に合せて、 岩手日報社説「都市計画問題」(6.29)
	「実行期に入れる盛岡都市計画」(9.13～:3)	●盛岡の椽内新邸宅で盛岡という都市・郷土 を研究する会(五日会)設立(10.5)
	「明治橋の架橋設計について」(11.0～:4)	●岩手日報社説「盛岡都市改良会を起せ」(10.11)
	「都市改良会創設私案」(11.19～:2)	●岩手日報に市技師による明治橋設計案解説掲載
1928	「我盛岡をして東北の模範都市たらしめよ」(1.4～)	●盛岡都市生活研究会設立(1.22)
	「京都と盛岡」(7.22～:3)	●盛岡都市生活研究会、植樹祭を共催(椽内参 加)(4.30)
	「農校跡地の待合指定地について」(8.28～)	●農校跡地の三業地指定への反対意見、読 者投稿という形で岩手日報に掲載(8.14)
	「田圃はつぶれる」(9.8～:2)	
1929	「新盛岡への機曾」(1.1)	●岩手県知事、三業地指定容認発言(1.18)
	「飯尾新知事に敢えて一言を呈す」(1.23)	●盛岡都市生活研究会、久々の例会(椽内参加)(4)
	「盛岡を中心として」(5.13～:6)	●岩手日報主催、岩手文化投票、椽内は、審査委 員として、事実上一人で県内を实地審査(9)
	「都会の悩み広告物の機」(10.11)	
	「県市民の意志を無視せる三業地指定」(11.1～:2)	●三業地指定反対市民大会(11.24)
	「復しても一言、三業地指定問題について」(12.10～:2)	●三業地指定取消し、公示(12.27)
1930	「盛岡散歩」(11.15)	●岩手日報主催、文化祭、椽内、「都市と文化」 講演(10)
	「時鐘在園に関する二、三の考察」(11.30～:2)	
1931	「明日の盛岡」座談会」(7.10～:5)	●椽内、「街路美講演会」(7.5)
		●北田元盛岡市長を中心とした座談会(椽内 参加)(7.6)
1932	「新明治橋の写真を見て」(7.8)	●明治橋竣工
	「盛岡風景雑感」(11.30～:3)	
1933	「新しい角度から都市機関を考察する」(4.18)	●椽内、講演会(「都市美と地方色」)、その後座談会(7.8)
	「暑苦しい運筆」(8.15～:2)	
	「いよいよ東京盛岡」(9.10)	●東京で盛岡都市美座談会(椽内、主催)(4)
1934		●椽内「日本都市風景」に対する岩手日報書評(4.16)
	「動き出した博士の町々 その当否の諸問題(一)」(6.20)	●市部土地開発会社、椽内を招聘し、実地批評会を実施(5)
		●椽内の新書出版記念の集まり、盛岡都市美協会の設立発起(5.26)
		●岩手日報、盛岡都市美協会の活動予定を報道(10.28)
1935	「市政選報」(2.16)	●椽内を囲む座談会、講演会、盛岡都市美協会ハイキング(5.23)
	「盛岡俳記」(8.22～:7)	●岩手日報社説「都市美協会の誕生」(5.29)
	「旧盛岡赤橋」(9.18～:3)	●盛岡都市美協会主催の歴史的建造物の見学会(椽内参加)(10.25)
1936	「盛岡の珍しい建物」(2.29～:2)	
	「盛岡の展望台」(3.22)	●盛岡都市美協会共催の「高松池を中心として大 迫園地化する座談会」開催(椽内参加)(7.11)
	「盛岡で筆をとる」(5.23)	
	「参差錯綜の町廻り禁止反対」(8.22)	
1937	「春寒市政雑話(下)」(4.15)	●盛岡都市美協会、研究懇親会 (椽内参加、翌日には講演会)(5.8)

- 「国の定める『都市計画法』を適用しさえすれば必ず合理的な優良な都市が実現するものと思うのは早計に失する。...やはり、市民諸君の愛市中心にまち、真に自己の住む町をよいものにしたいという誠意から、常に世論の形をもって、実行機関を把握しておる当局を鞭撻し、当局もよく市民の声を聴き、あまねく衆知をいれて、一面に欧米都市の進歩せる経営方法を参考とし、他面によく己の都市の民情風土等を斟酌して最も合理的なプランをたてねばならない。」

椽内吉胤「実行期に入れる盛岡都市計画(一)」(『岩手日報』、岩手日報社、1927年9月13日)

『岩手日報』における椽内の論考と盛岡の都市づくりの動向

生聲を擧げる

都市生活研究会

盛岡の新人よ窓を開けよ

栃内氏の主唱

昨秋十月盛岡市吉川氏邸の同氏
の親戚を中心として合同し都市生
活の研究会を組織する事となつた
市内青年有志は新會を期して同會
を具体化し来る二十二日午後六時
より公會多岐に於て「都市生活
研究会」の開會式を行ふ事となつ
た、盛岡人同人の主なる人は
高橋安太郎、太田清太郎、佐藤
勝身、小泉一郎、阿部廣順
の諸氏で政治、經濟、藝術、知識
の都市生活に關する一切の知識を
主眼として研究し都市生活の進歩を
期し同好者は同人たるを期して多
岐の親戚を動員する由にて、二十
二日の開會式にも約百餘人参加す
るを遂げし盛岡の新人よ（主唱者）

二十六へ申し込まれたといふ事や
ある、主唱者たる栃内吉川氏も其
合のゆるす限り東京より來り参加
すべし同氏は今の盛岡に關し大ま
かの言葉を述べた

龍崎……龍崎によると、知事や
部長の大體も變り、北田が變り
本報編輯が變り、北田が變り、
あまがた島は知らない月夜を期
としてゐる龍崎などでは、人事
の變遷はせめてもの感興でせう
そして、龍崎は變り、龍崎は變り
龍崎は變り、龍崎は變り、龍崎は
龍崎は變り、龍崎は變り、龍崎は
龍崎は變り、龍崎は變り、龍崎は

都市問題を単に専門家の独占にせずして市民各自の家を修理し台所の世話をやくような極めて卑近な心持でこの会に参加してほしい。（中略）。官吏、教師、会社員、芸術家、労働者その名その立場こそ異なれ一個の市民としては皆共通した或願望を持っておるべきはずだ。住みよい都市に美しい都市に、世にこれほど万人にアピールするの問題はあるまい。都市生活研究会の前途は洋々たるものがある。

栃内吉胤「盛岡を中心として（3）」
（『岩手日報』、岩手日報社、1929年5月14日）

「都市風景」の時期

都市風景論

- 「ここに言う都市風景とは、単なる美景を言うのではなく、都市のインディビジュアリティを構成する要素としての風景を指すものである」

枡内吉胤「盛岡を中心として（2）」（『岩手日報』、岩手日報社、1929年5月13日）

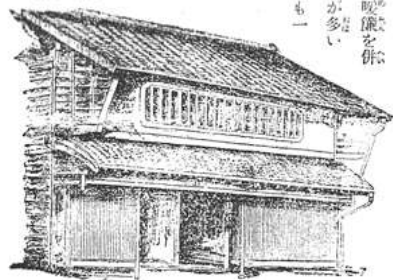
- 「今日、旧都市以来残っているそうした地形が、現代都市が要求する交通其他の「実用」の方途のためにむざむざ切り崩され破壊去られてよいであろうか！かの緑にめぐまれた丘も灰色の巷衞と化し、水辺も埋めたてられて倉庫などがたちならび、新しい風景が現出するが物寂びた風景はだんだんと亡びゆってう。しかも、その都市が未だ若かった時代には、或る地点に立つとその都市の辺境にはやはらかなスカイラインをただよわせて遠近の山々の相も望見することが出来たんだが、壁が壁と隔離し合い重・を相競うようになった今日の都市では、これをも遮って了った」

椽内吉胤「地形と都市風景・計画」（『大大阪』、8巻4号、1932年）

- 「都市美学の上では「都市風景」の代わりに「都市個性」或は「都市風格」というべきだと考える」「都市風景」は都市のサイズ、立地、経済的営力、歴史的背景などの「有形無形の要素複雑なる総合、組合せによって始めて都市風景の全面が見渡され、一つの纏った形態が付与されるに至るもの」

椽内吉胤「都市風景の構成」（『大大阪』、8巻11号、1932年11月）

(井 福)



暖簾には、紺地に屋號や商標を、染めぬいた上、タテヨコに白い糸で縫ひとつた極めて美術的な暖簾（長短の暖簾を併用）が多いことも一

(澤 金)



ガウを染る。又、福井の町家の



(福 井)

特色であらう。又、永平寺をひかへて、吊鐘や珠數等の象形招牌を掲げてゐる佛具屋の店がまひなどを見ると、いかにも福井の町らしい感をうけとる。

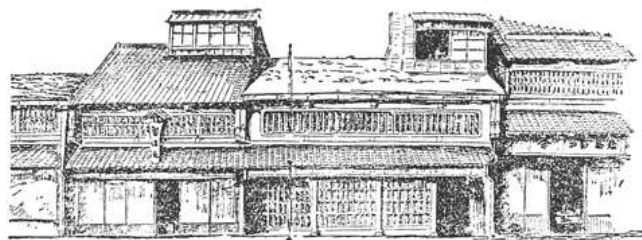
敦 賀

先年、アレキサンドラ・トルスタヤ女史が上陸し



(敦 賀)

て初めて日本の街の様子を見、
「さうに未だかつて、かばかり特異な風景を見たことがない」と感嘆したといふことであるが、實際、あの狭い道に建ちならんでゐる、格子をつけた装飾贅目的の木造の町家の家なみを睹ると、外国人なら「吾々日本人でさえ、一瞥の景さを感じする」



造が多。い。その外観の袖壁の具合な、も、見、受け、が、これ、は、越、風返し、（この地方ではサガリと稱ぶ）や、明り窓をつけ

(澤 金)



方田あたりのそれと共通のものである。金澤になると、ベニガラを塗つた町家がボツボツ見えてくる。屋根には、南町の森谷紙店の如き、特異な鬼瓦をつけ、凸字形に段をつけてゐる薬り型もあつた。用材は檜、タサマキ、杉の類。薬り型なんかで質のいい美しい町家も二三ないでもないが、百萬石のお城下町の町家として

(澤 金)



福井の町家は、二階は面壁をつけた途絶の造りになつてゐる際、だいたい大阪の町家と似通つてゐるが、その袖壁の深くかまへてゐる際、庇や小庇に太鼓ばりにカーヴをつけてゐる點など珍らしい特徴で、木部にはベニ

椽内吉胤「町家地方色 我都市に於ける伝統的町家形態の地方的特徴」

(『人情地理』、1巻3号、1933年3月)

長野、松本、直江津、富山、高岡、三国、金沢、福井、敦賀、松江、鳥取、山田、山形、米沢、福島、会津若松、北海道各都市、仙台、盛岡、青森、弘前、秋田、鶴岡、長岡、新潟、高田、甲府、名古屋、関町



甲州
縣沼宿



信州
追分宿



齋川
宿場

『日本都市風景』、1934年

- 頭から観測科学なんかの命ずる種々の方法に漂うていたんでは肝心の躍動しつつある風景のひらめきを逸するおそれがあることを知っているのも、ノートブック、スケッチブックその他の道具をかなぐりすて、まずもって「印象」に開けっぱなしに徘徊することを忘れなかった。
- 一見動きのない都市の風景でも、その屋根の下には千差万別の人間生活の情態がおりこまれていようから、それをねらえば自然唆興的な人情にも触れることが出来まいものでもなかろうが、私が焦点をおかんとするところはいくまでも都市そのものの風態的観察にある、従って、人情なんかを取り扱う場合とちがって、飛躍に乏しいかしらんが、しかし、よくその様態を考察してみると、その風物から特異な個性と表情を読むことが出来るんで...
- どこへ行っても同じような風景の展開...なんてことは、想像してみただけでもウンザリするではないか...

岩手県内での実地指導へ

常や審議りな議にと案
い十
教宣
に丁よは報

岩手県知事
岩手県内務部長
岩手県警察部長
岩手県学務部長
岩手県土木課長
岩手県農務課長
岩手県山林課長
岩手県耕整課長
岩手県社会課長
岩手県農事試験場長
岩手県養蠶試験場長
岩手県水産試験場長
岩手県技師
盛岡高等農林学校校長
同教授農林學博士
同教授農學博士
同教授
同講師
小岩井農場長
縣會議員
下閉伊水産會長
東北大學總長
工學博士
工藝指導所長
電氣協會
常務理事
都市美協會理事
盛岡商工會
議所會頭

岩手文化投票に就て

椴内 吉胤

金田一	杉内吉胤	井上喜太郎	國井喜太郎	堀田仁吉	國分謙吉	戸田幸藏	松本兼助	定盛舜祐	村上勝爾	鏡保之助	一小瀬	渡安福	竹邊正	與蓋孫	坂田千代	西澤重三	田村治郎	長谷川勝浩	栗田五枝	佐々木芳遠	中村忠充	丹羽七郎
-----	------	-------	-------	------	------	------	------	------	------	------	-----	-----	-----	-----	------	------	------	-------	------	-------	------	------

岩手県は左の如くにお歸する事に際定めました
岩手県知事
岩手県内務部長
岩手県警察部長
岩手県学務部長
岩手県土木課長
岩手県農務課長
岩手県山林課長
岩手県耕整課長
岩手県社会課長
岩手県農事試験場長
岩手県養蠶試験場長
岩手県水産試験場長
岩手県技師
盛岡高等農林学校校長
同教授農林學博士
同教授農學博士
同教授
同講師
小岩井農場長
縣會議員
下閉伊水産會長
東北大學總長
工學博士
工藝指導所長
電氣協會
常務理事
都市美協會理事
盛岡商工會
議所會頭

これまで統制の働いたものと
いへば、とくに所置おありする
ものがあつた。今日でも、東
北や関東などその歴史でもつ
て何々人教授なんかをやらす
統制も受けるが、併し、時代は
もうそんなお祭り騒ぎの時代でも
あるまい。

今、岩手県が立てられた文化
投票の如きは、何うしものとして
極めて珍ではあるが、舊に時代
に先驅する統制の働いたものと
して最も珍貴であり、且つ極めて
新鮮な感じの伴ふ企画であるとい

岩手文化投票の審査員と椴内による趣旨解説

(『岩手日報』、夕刊、1929年9月11日)

「この岩手県下に点在する各自治体の有する地方色を遺憾なく紙上に反映紹介して、それらの比較考量の機会を得せしめ、将来に処する上の最も進歩せる計画をたてる上の好指針たらしむると得ばこの企画の目的を充分に達せらるる」

椴内吉胤「岩手文化投票に就て」 (『岩手日報』、夕刊、1929年9月11日)



岩手文化投票の審査後の椽内による
コメント
(『岩手日報』、夕刊、1929年10月11日)

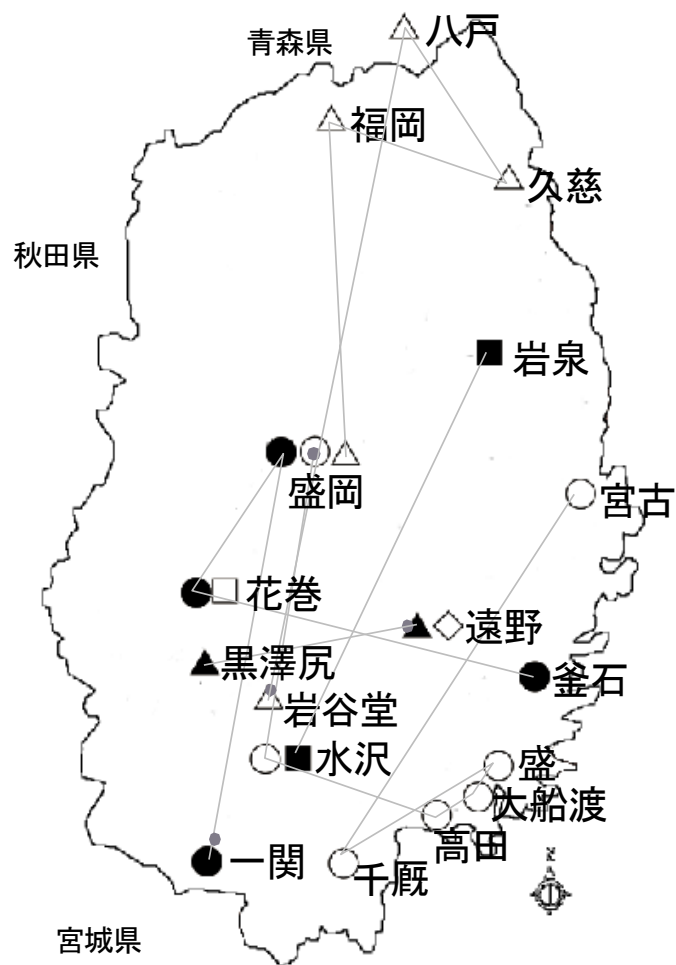
「昨年岩手県下の色々な文化設備を見て廻りましたが矢張り将来の岩手県の文化を進めて行くにはどうしても世界の大勢を見て立派な都市計画又は地方計画を樹てまして、やたらに新しいものを建てる事なしにその間良く岩手県の特徴との関係を考えまして、調和を破るような施設に対してはお互いにこれを牽制して行く。つまり自然的な文化と人工的な文化とをじっくり調和のあるようなものに、仕向けて行かなければならぬのではないかと思います。」

栃内吉胤「都市と文化（四）」（『岩手日報』、1930年10月22日）



昭和三陸津浪（1933年3月3日）

岩手県内、死者1396名、不明者1397名



日程	都市名	行程
1933 年		
6 月 5 日	一関	「都市美鑑賞実地研究会」／ともゑ会主催 午前 公園見学・意見交換 午後 町内めぐり 夜 座談会
6 月 6 日	盛岡	夜 講演会（「都市美と地方色」）、座談会 ／市産業課・都市計画課主催、岩手日報後援 観光施設座談会
6 月 7 日	花巻	町めぐり、座談会
6 月 8 日～9 日	釜石	8 日午後 実地視察 午後 講演会 夜 都市美計画座談会 9 日午前 講演会（愛国婦人会、商校、女学校） 都市計画の実地指導
10 月 22～23 日	遠野	22 日夜 歓迎会 23 日午前・午後 夜 講演会 都市美を語る座談会／遠野町役場主 催
10 月 24 日	黒沢尻	ドライブ（雨のため） 講演会・座談会
1934 年		
5 月	盛岡	南部土地会社主催の実地批評会
5 月	水沢	都市計画座談会（青年会同志主催）
5 月 20 日	高田	講演会・座談会
5 月 21 日	大船渡	講演会・座談会
5 月 22 日	盛	講演会・座談会
5 月	千厩	都市美研究座談会
5 月	宮古	講演会・座談会
挽秋	花巻	花巻温泉 常務・社長との対談
1935 年		
春	岩谷堂	町めぐり・講演会
5 月	八戸	講演会
5 月 19 日～20 日	久慈	町めぐり、講演会
5 月 21 日	福岡	講演会
5 月 22 日～23 日	盛岡	22 日夜 座談会（医学専門学校） 23 日午前 講演会（農学校） 午後 ハイキング・講演会
秋	岩泉	町めぐり、講演会
秋	水沢	講演会（小学校）、旧家めぐり
1936 年		
春	遠野	町めぐり、座談会

椽内が実地講演会で訪れた市町村と経路

柄内氏を迎へて

2

© 2000 Blackwell Science Ltd

風景と計画

海の玄関口の
整理



ことであつた。實地での考察も得られ、これに経験の豊富さを身振りといふものけ、説明が、そのにまで、ゆるゆるに導かれ、親切、及の職が観察し、その間、主として、観察が、あつて、よく、観察し、熟



「この本は、日本の政治経済の現状を、最新のデータに基づいて、詳しく解説している。読むと、日本の未来が、より明確に見える。ぜひ、読んでほしい。」

[illegible]

高田屋情

[illegible][illegible][illegible][illegible][illegible][illegible]

左上：釜石 『岩手日報』、1933年10月10日 左
下：高田 『岩手日報』、夕刊、1935年1月24日
右：遠野 『岩手日報』、1933年1月9日

盛岡都市美協会の設立（1934年）と活動

[illegible]

盛岡都市美協会の活動方針を伝える
記事（『岩手日報』、1934年10月28日）

ハ イ キ ャ ン グ

のきふ都市美會館に權し

行樂の春の爽と

たが遊藝會は、前日午後七時、都手宮
の一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、

左：盛岡都市美協会のハイキングを伝える記事（『岩手日報』、1935年5月24日） 右：評論・盛岡都市美協会（『岩手日報』、1935年5月29日）

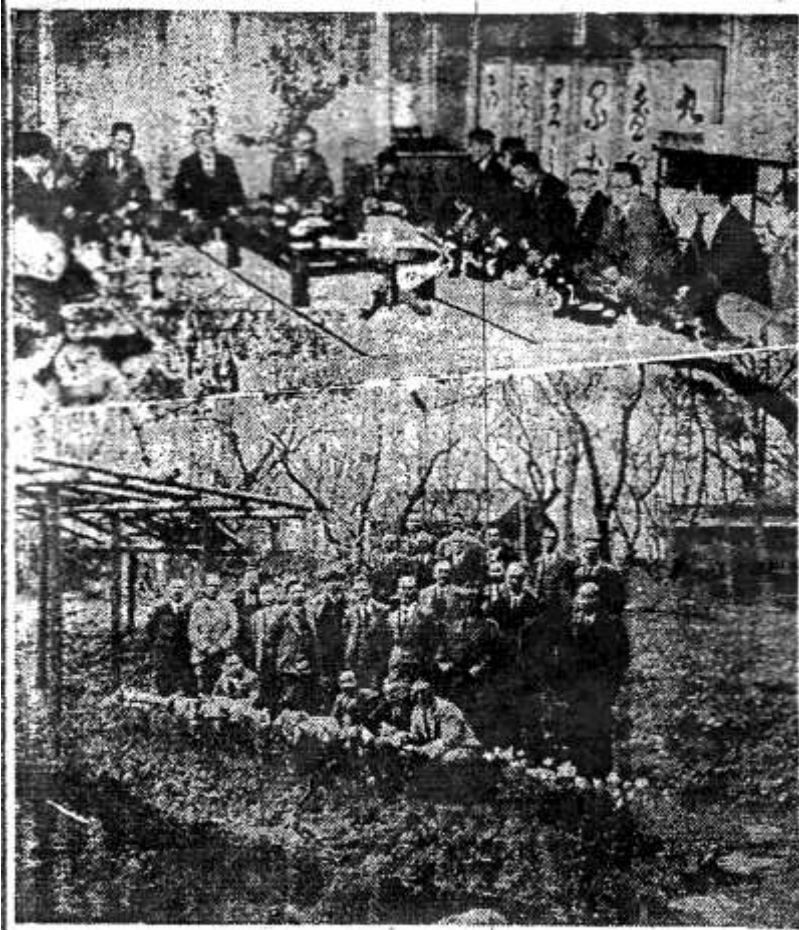
[illegible]

- 美しき盛岡をなるがままに任せて置いたら何んなものになるか判らぬ。いま協会が先に立って市民を指導して行くなれば盛岡は全国に於いてもまれな美しき都市として残って行くだろう思う。そして以上の如きプランを進めて行くなれば新たらしき名所を作ることができろう。市としても亦商工会議所としても多少の補助費を出して協会の活動を支援して行くのが妥当だろう。官民一致して最後の目的に達成に努むべきだ。市民の都市美意識を喚起する丈でも何の位尊い事でしょうか

「市の都市美化 第一歩を踏出す 盛岡都市美協会」（『岩手日報』、1934年10月28日）

- 宇治山田の所謂聖都計画は、大部分政府の力でやるのであるから立派に達成せらるるや必せりだが、我盛岡は、一つ市民の力で、模範都市としたいものである。それは決して出来ない相談ではないのである。

「枋内吉胤「盛岡俳記（六）」」（『岩手日報』、夕刊、1935年8月31日）



都市美を掘

栃内氏
迎へてきの

盛岡都市美協会及び盛岡観光協
では都市美研究の權威者吉風氏
を迎へて八日ハイキングを催わ
れ、研究親睦會を開いた。吉風氏
は午後一時、盛岡市役所を出
発し、概ね深き岩手公園を一週
し、津川畔をさかのぼつて富士見
より下小路本町に出、岩手公園を
ハイキングして林水町、岩手公園を
一周、概ね深き岩手公園の一週
し、津川畔をさかのぼつたのが三時過ぎ、
盛岡美に到着した。夫より千歳、ニジ
ノ、胡瓜、大根などの折詰を
贈りてビールで饗宴を演じ、自ら
自慰のない観光都市美に臨する
意趣を謝辞後、旭市市長の挨拶
に次いで、盛岡氏の謝辞を演じ、

バスで送つたが、彼
等は不潔な動物と
者に食ふと昔は山
清原好きなきなだつ
育される様になつ
録事なくされた、
は恰度豚のやうな
と腹出し、道徳的
誕生に有罪だ、道徳
位づつ清浄したいと
市議
この頃は阿部清氏
子と数萬金を費し
て市内六千坪、阿
部清氏の人を見るも
の親戚の一族の手
と建物の歴史を述べ
盛岡市にしたいと、結
語の後、阿部清氏

盛岡都市美協会のハイキングを伝える記事
(『岩手日報』、1937年5月9日)

日本都市風景協会の設立（1936年）と活動

「都市美協会の伝統と本来の精神が無視され、会の運行は、役員たる土木局の役人の独断によって決せられ、その会合の如きも恰も役所の会議の如き形式のものとなり」

「都市美協会本来の澆刺たる精神を失った形骸の都市美協会には些も未練がない」

「従来の都市美協会をそれらのお役人たちにお委せし、ここに全然新規に日本都市風景協会という団体を昨年の11月25日に先輩や友人の熱烈な賛助をえて発会し、その旗下に活動することになった次第である」

枅内吉胤「我都市文化運動の一断面 私が都市美協会を脱会する迄」（『岩手日報』、夕刊、1936年1月12日）

都市美を護らうと 自由人の集り

東京百景も選定する

ゆうべ午後七時丸の内東武劇場の地下グランドに『都市風景』の集まりといふ名前はやさしいが、厳風、幸徳元氣のいゝ會合があつた、帝都の都市美を無情な破壊から護り、情味豊かに育てて行かうといふ自由人の集まり、その運動を都市を愛する民衆の聲として守りたてて行かうといふ會合であるが、集まつた顔ぶれは

かつての都市美協會設立者篠内吉房氏、バリー會幹事武勝健氏、工政會の食糧陳治郎氏、詩人川越國弘氏、造園研究家で畫家の石川全氏、彫刻研究家の小西彦聖氏、風政協會の水谷健一氏、童話家の武田寅次郎氏等……實に昨秋十一月末丸の内で總會しゆうべにその第一回總會であつたのだが、美術界、文藝界、建築界、造園界その他各方面の有志百五十餘の會員を集めていよゝ

都市の美を育成し度いといふ民衆の聲を如何に具體化しようかの相談を行つた、翌朝リイ『都市風景』雑誌の設刊、東京百景を選定して贈へがその作戦

へ、都市風景協會の名で『都市風景』を編集、雑誌の編集、東京、新宿、上野等主要部



構内及び廣域を風致的觀點から三月中旬頃實地觀察する事

一、松山デリーの開闢、東京ハイキングパーティを組織

ア、東京近傍の小部西觀察旅行を促す事

等々を申合せ午後九時半閉會した、なほ會長に徳川義経像を推す事

も決定したが、席内には論議委員、調査委員、事業委員、庶務委員、調査委員等が設けられて、各自自由な立論から廣く都市風景の保護を呼びかけることになつてゐる（當夜は深夜の會合、立つてゐるのが役員人の床内吉房氏）

「帝都の都市美を、無情な破壊から護り、情味豊かに育てて行かうという自由人の集まり、その運動を都市を愛する民衆の聲として守りたてて行かうという會合」

日本都市風景協會の發會式を伝える記事
（『報知新聞』、1936年2月19日）

東京版

銘酒 千福



銀座は汚い

「銀座・歩を銀座・語を會の結論」

○東京オリムピックを控へて日本
の諸般となる銀座——それが
現在の電柱と自轉車と路面電車
とバラツクの銀座でよいでせ
うか——

○いふので日本都市風景協會と銀
座通聯合會の共同主催の「銀座
を歩き銀座を語るの會」は既報の
如く二十四日行はれた、同日午後
一時銀座三丁目聯合會事務所に
集結した一行は先づ星張町から
新橋までの間を約二時間に亘つて
檢討を加へながら歩いた午後三
時から千正屋で懇談會に入つた

○風景協會側からは横内理事、
中村はいばら飯店主人、酒田家
石川全、美術評論家黒田勝心、
パリ會武蔵野、關義雄の八氏
注文のきき役たる聯合會側は
保坂、牧野町會副會長以下銀座
八丁の町會役員十七氏——
○先づ前人を代表する保坂氏の

「銀座を愛すればこそ、どうか忌
憚らない感口を云つて下さい」
といふ挨拶に始まり、銀座通りの
建築、道路、路面電車、年中行事
オリムピック開催に就いての銀座
商人の心得等について午後六時ま
で熱心な討論が行はれたが、その
結果先づ聯合會のより以上の強
化を計り、銀座商人は結果して銀
座美化の確感ある團體となつてこ
の目的のためには政府や市に就し
ても強力な説教を導るやうにな
らう、それと共に銀座美化と輿論
を全國的に振さうといふ事で、具
體的にはとりあへず聯合會の名
により銀座路面電車駅止と電線を
全部地下に埋没して貰ひたいとい
ふ問題で内橋と市に對して建議
することになった

○なほ觀察の結果、銀座の欠點
について一致した意見は醜陋な
る路面電車とその騒音、汚いバ
ラツク建築、そのために伸びる
電柱と電線、そのために伸びる
れんが葺きの木、道路にお
かれた自轉車、統制のない賣飯
屋、地下鉄入口、庇の低い日
除け等々であつた「寫眞はその
證據也」

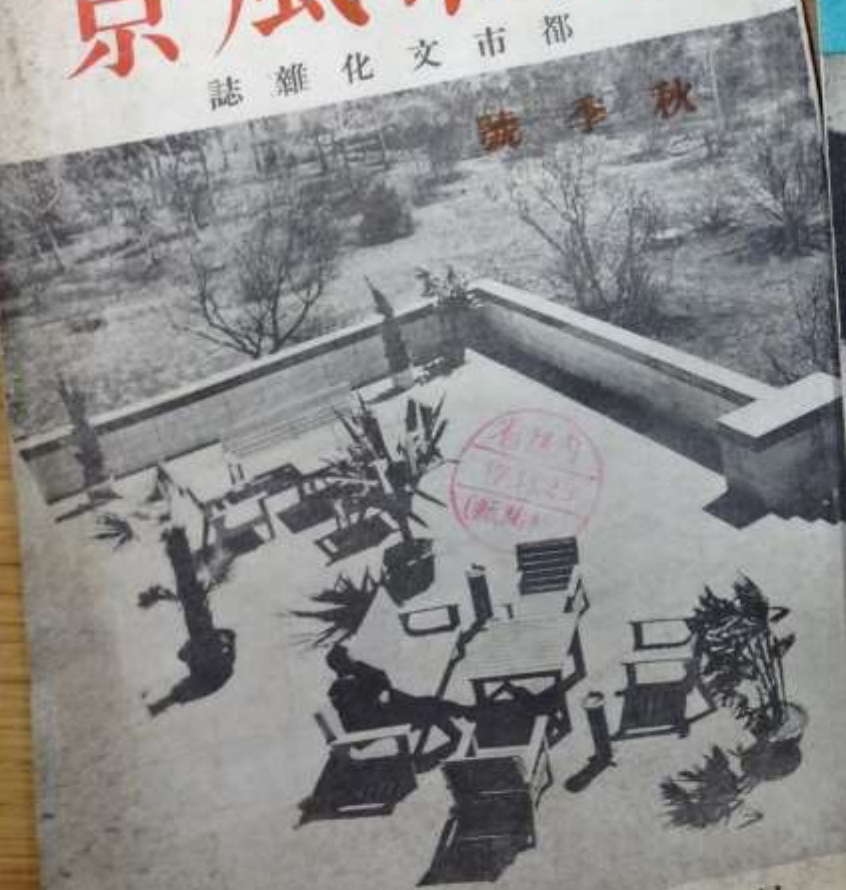
日本都市風景協會と銀座通聯合会との合同行事を伝える記事
(『報知新聞』、東京版、1936年11月25日)

都市風景

都市文化雜誌

秋季號

第四卷 第四號



日本都市風景協會

都市風景

都市文化研究雜誌

冬季號

第六卷 第一號



日本都市風景協會

椽内の都市美運動の終息



岩手日報の休刊を伝える号外（1937年12月19日付け、栃内吉胤が名指しで批判されている）（岩手日報社『岩手日報百十年史』（1988年））

「「風景」とか「美」どころの沙汰でなくナリフリにかまっておられんくらいに窮迫したものがあ
るのであるろうか…。なるほど、昨今、我が内外に
わたって一種息苦しい重厭と殺伐な空気が感じら
れることはおもうべからざることであろうが、し
かし、そうした空気が濃厚であればあるほあと、
吾人は、美を高調する必要があるのではないか…
と考える。言うまでもなく美は決して風流韻事に
類する余贅事ではなく、実に、人間生活に於ける
本質的欲求であり、人間が享け入れる快樂の最高
形式であるとすれば、世界歴史のいずれの時代、
いずれの国においても、「美」を実現することに
失敗したような国は眞に偉大ではなかった事をわ
れわれは銘記したい。」

椽内吉胤「三年後と東京 都市芸術の観点から」（『中央公論』、52巻4
号、1937年4月）

「いささか社会改良家気どりでやってきたのも、憶えば鳥許の振舞とでもいおうか」

「最初、他の多くの人たちとともに、一種華やかな憧憬と希望をかけて出てきた東京というものが、だんだん鼻についてきて、いつまでもこんな東京の生活にしがみついているよりも、いっそ「都落ち」をして田舎の町に帰臥したほうがましではないか…と考えるようになっているのである。」

「この節、やたらに「大東京」だ、「大大阪」だと、大の字を冠して、五百万だ、六百万だと、その地積と人口の大を誇り、「東京はニューヨークにつぐ世界の大都市だ」と呼号してよろこんでおる傾がみえるのは、まことにめでたい話で、（中略）、今日の東京のように、そこに何等の総合的計画もなく、だらしなく広がってしまっは、「大男」の比喻ではないが、総身に血がめぐりかねて、半身不随意になったも同様、そこには形骸の都市はあっても、人と人の心を繋ぎあわせる一種の力（郷土心とでもいほうか）が亡失し、もはやこうなっは、その都市は解体したも同然なのである」

椽内吉胤「東京といふところ」（『日本評論』、12巻6号、1937年6月）

「かのチャールス・マルフォード・ロビンソンが『都市計画の意義はもっともっと深遠なものがあって、その都市に住んでいるというプライドを感じ、一種のインスピレーションにも触れ、何かしらグードと希望を見い出していけるよう…即ち、都市生活者の精神や道徳の上に良い影響を及ぼすように仕向けていき、人生というものには金儲け以上の何物かがあるという事実を知らしめるようにその都市を改造することにある』云々と説いているところであるが、そんな高遠な指導精神などは薬にしたくても無く、単に道路を広げたり港湾を整備したりするに止まっていてわれわれの人生の本質的問題に触れざる限り、かかる都市計画にはまた多くの望みをかけることができないであろう。」

- 1945年3月、空襲によって高田馬場諏訪町の自宅を焼失した椽内は、妻の実家のある羽後本荘へと疎開の途につき、その地で終戦を迎えた。
- しかし疎開の長旅が響いたのか、体調を崩し、そのまま回復することなく1945年11月、享年57歳で亡くなった。
- 遺骸は東京の多磨墓地に葬られた。

【表－１】 椽内吉胤の略年譜と時期の区分

年	月	事項	網掛けは各時期の主要著作	
1888	3	秋田県土木技師・枋内吉トの長男として盛岡で誕生		時期
1907	3	盛岡中学卒業		
1914		早稲田大学英文科卒業 同年、佐渡毎日新聞入社		
1916		東京朝日新聞入社		
1918		東京朝日新聞退社		
1922	5	「環境より見たる都市問題の研究」5)出版		① 都市環境
1924	春	帝都植樹協会設立に参加		
1925		「椽内」という表記を使用し始める		
	10	都市美研究会設立に参加(主唱者)、幹事に就任		② 都市芸術
1926	10	都市美協会設立に参加、常務理事に就任		
	12	「都市計画」12)出版		
1927	12	新しい襖紙の会設立に参加(設立発起人)		
1928	1	盛岡都市生活研究会設立に参加(設立発起人)		
1934	4	「日本都市風景」25)出版		③ 都市風景
		盛岡都市美協会設立に参加、顧問に就任		
1935	11	日本都市風景協会設立に参加(設立発起人)、常務理事に就任、同時に都市美協会から脱会		
1945	11	盛岡にて 死去。享年 57 歳		

以上のように通観される椽内の都市美運動は、都市計画への審美的観念の導入という面では、歴史的町並みの規範性の主張や、地方都市の個性という次元への展開に、また、公共的観念を有した市民の育成という面では、市民主導の都市づくりを見据えて、運動主体としての市民という構想への展開に先駆性があり、また、個性があった。そして、椽内の都市美運動の最大の特徴は、その運動実態にあった。都市美運動を単に言説に留めずに実践し、特に故郷盛岡等でメディアと協働した世論喚起の運動を精力的に展開していた。盛岡の知識人階級たちが市民として協力することで、盛岡では市民による都市づくりの萌芽が確かに見られたのである。



椽内吉胤（とちない・よしたね 1888—1945）



中島直人『都市美運動 シヴィック
アートの都市計画史』2009年



酒井憲一『都市美協会運動と 椽内
吉胤』2008年